

<完璧な世界>への絶望と <荒廃>への希望

人間存在は、いったい何に対して懸命に生きてきたのか

上柿崇英



本書は、米ライス大学のチ
 ャンシー・モートンによる人
 文学的環境学について取り上
 げた書物である。ただしこれ
 は単なる解説本ではない。そ
 こにはモートンの言葉を借り
 た、著者自身の現代社会への
 断え、端的には、現代人が抱
 えた「完璧な世界」への絶望
 という問題が論じられている
 からである。

まずは、モートンの思想に
 ついて述べる。エコロジス
 ムに触れたことがある者な
 らば、そこにアルネ・ネスと
 の共通点を見出すことは容易
 である。なぜならネスが、エ
 コロジの核心部分を根源的
 な世界像の転換——「関係的
 ・全体的場」として、自己や
 事物を抱え直す——に求めた
 まじり、モートンもまた、こ
 こで「もの」とは何か、「客
 体」とは何かを問うてしまっ
 てる。環境哲学において、本
 書から窺えるモートンの思想

は、確かに新たな手がかりの
 萌芽を感じさせるだろう。だ
 が本書の真に見るべき箇所
 はやはりその言葉を介して、
 著者自身が投げかけている問
 いの方にある。すなわちこの
 世界の日常に対して、「なぜ一
 部の現代人は絶望するのかと
 いふ問題に他ならない。」

まず本書において、「この絶
 望は常にひとつの原風景
 を伴っている。それは静かな
 郊外、峻格に区分けされた敷
 地に同形状の団地が整然と立
 ち並び、いわゆる「ニュータ
 ウン」の風景である。なぜ
 「ニュータウン」なのか。そ
 れは、「ニュータウン」の醸し
 出す、あの無謀で、完全に、
 無矛盾の一言性を思わせる光
 景が、まさにわれわれの想起
 するこの世界の「象徴」だか
 らに他ならない。確かにわれ
 われは、この世界を人類の進
 歩、そして人類の叡智が結果
 したものと理解しているが
 もしれない。だが著者に言わ
 せれば、そうした世界の「完
 璧」にこそ、人間はむせが
 えり、動揺し、激しく絶望し
 ているのである。

ではなぜ人間は、完璧な
 世界に絶望するのだろうか
 か。それはこの世界が「完璧
 さ」を装うがゆえに、曖昧な
 ものが現れる一切の余地を許
 さないためである。例えば
 「完璧な世界」には、あつて

はならないことがある。若き
 日の著者が体験した「同級生
 の自殺」もまたそうであった。
 それがあたかも無かったかの
 ように隠されたとき、著者は
 否応なく触れたのである。「完
 璧」でなければならぬため
 に、徹底的に異物を除去し、
 逸脱的な事態を抑制してい
 く。この世界の深淵にいつも
 のに、ある。一義的な世界に
 おいては、人間は決して真の
 意味での「喜」を感じず
 ことばで、著者はそ
 う訴えかける。だが多くの人
 間は、瞬間にそうした複製
 を忘却し、すべてを飲み込む
 「完璧」の中で眞事に適応
 して生きていく。深淵に触
 れた者たち、あるいはそうし
 た「防衛機構」に参加できな
 かった者たちにとつて、それ
 はある種の「狂気」でさえあ
 るだろう。彼らはそうした
 人々の無邪気さを見て傷つ
 き、そしてまたもや絶望する
 のである。

こうした絶望を背負った現
 代人に、果たして、救いは
 あるのだろうか。著者はその
 手がかりを「荒廃」に求めて
 いる。「腐爛、シヤッター
 通り」、そして「ニュータウ
 ンの陥穽、精神病院、
 これらは著者にとって「完
 璧な世界」の傍らにあつて、
 見放され、無視され、放置さ
 れたもの、いわば「放擲さ
 れたもの」であり、そこから

ある。確かに「完璧な世界」
 は、これからは情報、ロボッ
 ト、人工知能、生命操作を組
 み合わせることで、われわれ
 の行為を水面下で調整する多
 彩なシステムを産み出し、
 われわれはますますその自動
 化された機構に依存していく
 ことになるだろう。だがその
 反面、「完璧な世界」がもた
 らす矛盾は、もはや極地に達
 して振り切れた。例えば「完
 璧な世界」の象徴であった
 「ニュータウン」は、すでに
 「荒廃」しているのではない。
 「一言に高齢化」、持続性を破
 ることをつつある今日の「ニ
 ュータウン」、それは「若い人
 類」を忘れた世代によって創
 出された、一世代りの使わ
 れ捨ての街だ。その風景が醸し
 出すのは「完璧な世界」など
 ではなく、「今」というとき
 を際限なく拡張し、何もか
 もが実現されるはずだと素朴
 に信じた時代の結末、いわば
 「無限の生」という幻想が破
 れ、代わりに入間的生の現実
 が剥き出しとなった光景に他
 ならない。

われわれはすでに、「完璧
 な世界」が「無」と化した
 時代を生きている。そうした
 時代にあつて、「荒廃」が訴
 えかけるのは、希望、だろ
 うか。そしてただその曖昧な
 ものに触れているだけで、果
 たしてわれわれは本当に、救

(環境哲学・現代人間学)